

令和5年度(2023年度) 小学校特別活動プロジェクト研究

「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成を目指す小学校の特別活動

－課題解決の過程の充実を通して－

内容の要約

本研究では、特別活動において、児童が学級や学校の生活をよりよくする課題解決の過程の充実を図ることを通して、主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成を目指した。児童が目的意識をもって課題解決に取り組めるように「活動の目標」を設定し、「あいであつめまシート」や「ありがとうカード」を活用したり、「活動交流会」を行ったりした。これにより、児童の「自ら問題を発見し、解決する態度」や「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」に変容が見られ、主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成につながった。

キーワード

「学ぶ意欲を引き出す学習集団」	課題解決の過程の充実	「活動の目標」
「あいであつめまシート」	「ありがとうカード」	「活動交流会」

	目		次
I 主題設定の理由	(1)	V 研究の進め方	(6)
II 研究の目標	(2)	1 研究の方法	(6)
III 研究の仮説	(2)	2 研究の経過	(6)
IV 研究についての基本的な考え方	(2)	VI 研究の内容とその成果	(6)
1 特別活動において育成を目指す資質・能力について	(2)	1 研修と実践の往還	(6)
2 本研究における「学ぶ意欲を引き出す学習集団」について	(2)	2 課題解決の過程を重視した特別活動の実際	(7)
3 本研究における特別活動の課題解決の過程について	(3)	3 児童の変容	(12)
4 課題解決の過程を充実するための手立てについて	(3)	VII 研究のまとめと今後の課題	(14)
5 研究成果の検証方法について	(6)	1 研究のまとめ	(14)
		2 今後の課題	(14)
		文 献	

滋賀県総合教育センター

鵜野和也 佐々木智男

児童が主体的に学びに向かう姿

「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成

各教科等の学習

個人

自ら問題を発見し、
解決する態度

学級集団

自分の考えや思いを話し合ったり、
互いに高め合ったりする風土

特別活動における課題解決の過程の充実

児童の目的意識を明確にする
「活動の目標」の設定
○特別活動を主体的に取り組む
ことができる



「活動の目標」を意識した話し合いを促す
「あいであつめまシート」
○「活動の目標」を意識してアイ
デアを集めたり、仲間と話し合っ
たりすることができる



あいであつめまシート

1. 活動の目標の目標をまよししよう

2. 活動の目標の目標をまよしよう

3. 活動の目標の目標をまよしよう

4. 活動の目標の目標をまよしよう

5. 活動の目標の目標をまよしよう

6. 活動の目標の目標をまよしよう

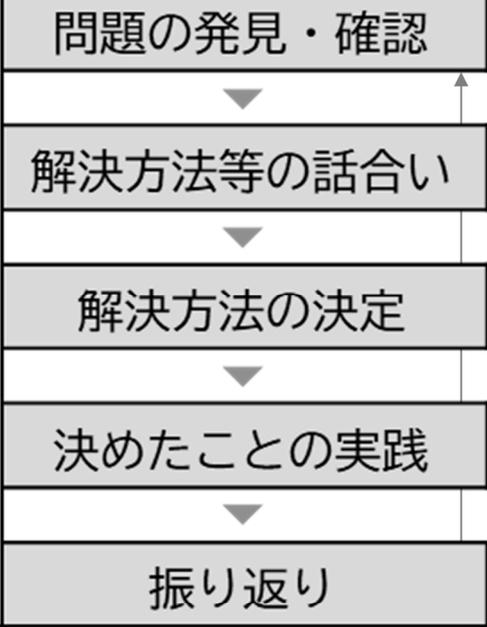
7. 活動の目標の目標をまよしよう

8. 活動の目標の目標をまよしよう

9. 活動の目標の目標をまよしよう

10. 活動の目標の目標をまよしよう

目的を意識した児童の活動



議論の活性化を図る
「活動交流会」

○自分達では思いつか
なかったアイデアを他者
から集める機会をつ
くることができる



互いのよさや頑張りを認め合い、自己有感を高める
「ありがとうカード」

○他者からの評価を得られる
○次の課題解決につなげられる



ありがとうカード

1. 活動の目標

2. 活動の目標

3. 活動の目標

4. 活動の目標

5. 活動の目標

6. 活動の目標

7. 活動の目標

8. 活動の目標

9. 活動の目標

10. 活動の目標



研修
プロジェクト研究会
(全5回)

- 第1回 研究内容の目標と方法の共有
- 第2回 実践交流
- 第3回 実践交流と授業構想
- 第4回 各実践校による実証授業と研究協議
- 第5回 研究の成果と課題の分析

児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができる

「そう思う」と回答した学校の割合 11%(全国比-8.3) ! 「当てはまる」と回答した児童の割合 27.6%(全国比-2.4)
【令和4年度全国学力・学習状況調査 滋賀県の結果】

学ぶ力向上の取組を進める三つの視点
【視点2】学ぶ意欲を引き出す学習集団づくり
【第II期 学ぶ力向上滋賀プラン～「読み解く力」の育成を通して～】

互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、資質・能力を育成することを目指す。
【小学校学習指導要領(平成29年告示)】

特別活動の充実により各教科の「主体的・対話的で深い学び」が支えられる
【小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編】

小学校特別活動プロジェクト研究

「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成を目指す小学校の特別活動

－課題解決の過程の充実を通して－

I 主 題 設 定 の 理 由

小学校学習指導要領(平成29年告示)において、特別活動の目標は、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、資質・能力を育成することを目指すとされている。

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編(以下、学習指導要領解説という。)では、「各教科等で『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を行うためには、児童は失敗を恐れずに行動することができたり、他の児童と互いの考えを伝え合ったり協力し合ったりすることができるような、学級における児童同士の人間関係や、教師と児童の信頼関係があることが重要になる。特別活動は、学級活動における自発的、自治的な活動を中心として、学級経営の充実に資するものであり、特別活動の充実により各教科の『主体的・対話的で深い学び』が支えられるという関係にもある」¹⁾と述べられている。

本県では、「第Ⅱ期 学ぶ力向上滋賀プラン～『読み解く力』の育成を通して～」(平成31年 滋賀県教育委員会)に基づいて、三つの視点から「学ぶ力」を向上する取組を進めている。その中の「視点2」を「学ぶ意欲を引き出す学習集団づくり」とし、「子どもたちが、自分の考えや思いなどを、安心して表現できる人間関係を築き、その中で豊かな人間性を育成するために、思いやりをもって関わり合い、互いの違いを認め、高め合える、学びに向かう集団づくりが大切」²⁾であるとしている。そして、具体的な取組の例として、「学級活動や児童会・生徒会活動等の児童生徒の自治的な活動の充実」²⁾を挙げている。このことから、「学ぶ意欲を引き出す学習集団づくり」には、特別活動の果たす役割が大きいと考える。

一方、令和4年度全国学力・学習状況調査における児童質問紙の「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」という設問に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答した児童の割合は、滋賀県は27.6%(全国比-2.4)であった。また、学校質問紙の「児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができている」という設問に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答した学校の割合は、滋賀県は11%(全国比-8.3)であった¹⁾。このことから、課題解決の過程を意識した取組は十分であるとはいえず、課題解決の過程をさらに充実させていく必要があると考える。

以上のことから、特別活動における課題解決の過程を充実させることで、児童が自ら問題を発見し、解決する態度が身に付くとともに、児童が自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土を醸成することができるようになり、各教科の学びが支えられると考える。そこで、本研究では、特別活動において、児童が学級や学校の生活をよりよくする課題解決の過程の充実を図ることを通して、児童が主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成を目指すこととした。

¹⁾ 令和5年度全国学力・学習状況調査における児童質問紙の同調査において、最も肯定的な「当てはまる」と回答した児童の割合は、滋賀県は28.7%(全国比-1.8)であった。また、学校質問紙の同調査において、最も肯定的な「そう思う」と回答した学校の割合は、滋賀県は17.6%(全国比-3.8)であった。(令和5年7月)

Ⅱ 研 究 の 目 標

特別活動において、児童が学級や学校の生活をよりよくする課題解決の過程の充実を図ることを通して、児童が主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成を目指す。

Ⅲ 研 究 の 仮 説

児童が学級や学校の生活をよりよくする課題解決の過程において、児童が目的を意識して活動に取り組めるように、「活動の目標」の設定や「あいであつめまシート」「ありがとうカード」「活動交流会」の手立てを講じる。このような活動を積み重ねることで、児童が自ら問題を発見し、解決する態度が身に付き、児童が自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土を醸成することができれば、児童が主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成を実現できるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 特別活動において育成を目指す資質・能力について

学習指導要領解説では、特別活動において育成を目指す資質・能力や、それらを育成するための学習過程のあり方を「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点で整理している。

「人間関係形成」とは、「集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成するという視点」¹⁾であり、「人間関係形成に必要な資質・能力は、集団の中において、課題の発見、実践、振り返りなどの特別活動の学習過程全体を通して、個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれる」¹⁾と述べられている。

「社会参画」とは、「よりよい学級・学校生活づくりなど、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとするという視点」¹⁾であり、「社会参画に必要な資質・能力は、集団の中において、自発的、自治的な活動を通して、個人が集団へ関与する中で育まれる」¹⁾と示されている。

「自己実現」とは、「集団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする視点」¹⁾であり、「自己実現に必要な資質・能力は、自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の在り方や生き方を考え設計する力など、集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれる」¹⁾と述べられている。

これらの資質・能力は、「様々な集団活動を通して集団や個人の課題を見だし、解決するための方法や内容を話し合っ、合意形成や意思決定をするとともに、それを協働して成し遂げたり強い意志をもって実現したりする」¹⁾ことを通して育成するとされている。

このことから、特別活動における課題解決の過程の充実を図ることで、児童が主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成を目指す。

2 本研究における「学ぶ意欲を引き出す学習集団」について

特別活動において、児童が互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題の解決に取り組むことにより、「自ら問題を発見し、解決する態度」が身に付くようになることを考える。小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編では、「学習の基盤となる資質・能力」ⁱ⁾の一つとして、

ⁱ⁾ 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編では、学習の基盤となる資質・能力として、「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」が示されている。

「問題発見・解決能力」が示されており、特別活動において身に付けた「自ら問題を発見し、解決する態度」は、各教科等の学習の充実にも生かされると考える。

さらに、学習指導要領解説では、「学級経営の内容は多岐にわたるが、学級集団としての質の高まりを目指したり、教師と児童、児童相互のよりよい人間関係を形成しようとしたりすることは、その中心的な内容である。(中略)学級経営は、特別活動を要として計画され、特別

活動の目標に示された資質・能力を育成することにより、さらなる深化が図られることとなる」¹⁾と述べられている。児童が特別活動において身に付けた資質・能力により学級集団の質が向上し、「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」が醸成されることで、各教科等の学習の充実にも生かされると考える。

これらのことから、特別活動における課題解決の過程の充実を図ることにより、児童が「自ら問題を発見し、解決する態度」を身に付け、「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」が醸成されると考える。このような集団は、児童が主体的に学びに向かう基盤となると考え、本研究では「学ぶ意欲を引き出す学習集団」とする(図1)。

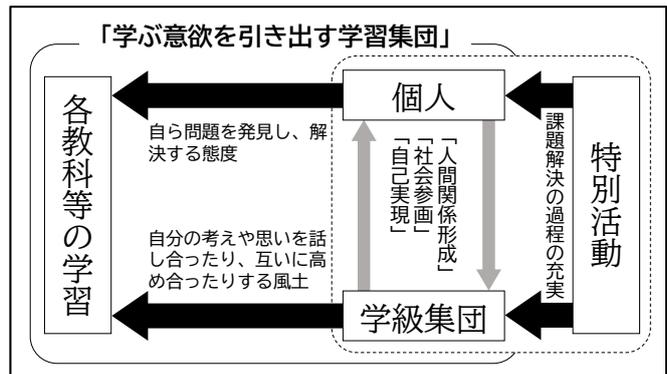


図1 本研究における「学ぶ意欲を引き出す学習集団」について

3 本研究における特別活動の課題解決の過程について

「なすことによって学ぶ」を方法原理としている特別活動において、学習指導要領解説では「学級や学校生活には自分達で解決できる課題があること、その課題を自分達で見いだすことが必要であること、単に話し合えば解決するのではなく、その後の実践に取り組み、振り返って成果や課題を明らかにし、次なる課題解決に向かうことなどが大切であることに気付いたり、その方法や手順を体得できるようにしたりすることが求められる」¹⁾と示されている。また、「学級活動において育成することを目指す資質・能力は、問題の発見・確認、解決方法等の話し合い、解決方法の決定、決めたことの実践、振り返りといった基本的な学習過程の中で育まれるものである」¹⁾と示されている(図2)。

本研究では、研究委員が学級活動または児童会活動を重点的に取り組み、課題解決の過程として、「問題の発見・確認」「解決方法等の話し合い」「解決方法の決定」「決めたことの実践」「振り返り」を基本とした実践を行い、次の課題解決へとつなげるようにする。

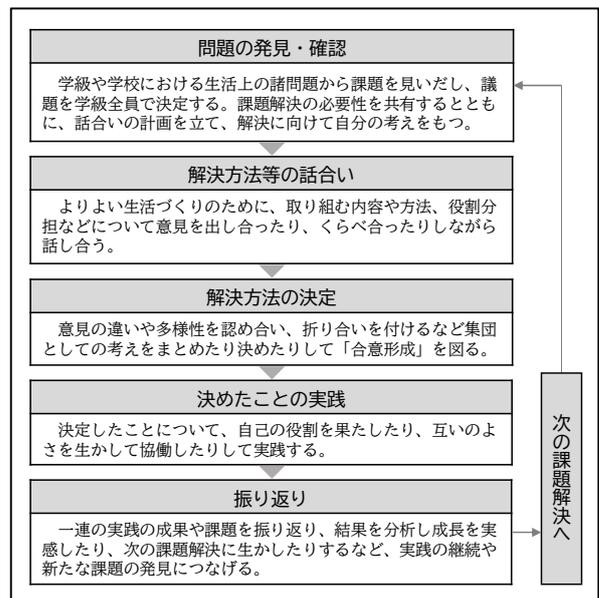


図2 学級活動(1)の学習過程の例(学習指導要領解説から整理)

4 課題解決の過程を充実するための手立てについて

(1) 児童の目的意識を明確にする「活動の目標」の設定

学級活動や児童会活動における児童の目的は、「学級や学校の生活をよりよくする」ことであり、

児童の主体的な活動とするためには、児童が目的意識をもって課題解決に取り組むことが重要である。しかし、「学級や学校の生活をよりよくする」という言葉は抽象的なものであり、その捉え方は人によって異なりやすい。そのため、「みんなが仲良くなる」といった目標を学級等で独自に設定することもあり、本研究ではこれを「中位目標」と呼称する。「中位目標」は、イベント等のスローガンとして活用することにより、児童が目的意識をもちやすくする一方で、一度のイベントで「中位目標」を実現することは困難であり、実現できたかどうかの判断も容易ではない。

そこで、本研究では、児童の目的意識をより明確にするために「活動の目標」を設定する(図3)。「活動の目標」の設定とは、目的および「中位目標」を実現するために、それぞれの係や班のイベントで実現したい具体的な児童の姿や行動を設定することである。児童がイベントを計画する際に「活動の目標」を設定することで、「何のためのイベントなのか」を明確に意識できるようにする。

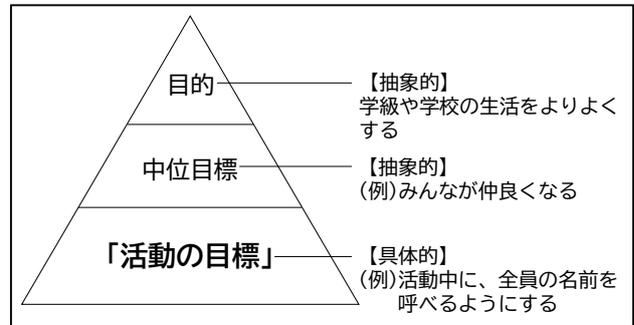


図3 児童の目的と各目標との関係性について

このように、目的や「中位目標」に対して、具体的な「活動の目標」を設定することにより、児童が目的意識をもち、学級活動や児童会活動を主体的に取り組むことができるようになると思われる。

(2) 「活動の目標」を意識した話し合いを促す「あいであつめまシート」

「解決方法等の話し合い」と「解決方法の決定」の場面において、「活動の目標」を意識した話し合いが行えるように、「あいであつめまシート」を開発した(図4)。「あいであつめまシート」は、「アイデアを集めましょう」という意味と「愛で満たされるような集団になるように」との願いを込めて名付けた。

「あいであつめまシート」は、イベントを計画する際に作成するものであり、児童が「活動の目標」を設定することから始める。「活動の目標」は児童の発想を基に決めるが、実現したい児童の姿や行動を具体的に記述できるようにする。「活動の目標」を設定後、それを実現するための方法について、自分で考えたり、他者からアイデアを集めたりする。そこで得られたアイデアを記述し、蓄積できるようにすることで、「活動の目標」と照らし合わせて仲間と検討できるようにしている。また、「あいであつめまシート」は児童の計画書としての側面もあり、日時や内容、役割分担について

あいであつめまシート

名前()

1. 次回の活動の目標を書きましょう。
(例)活動中に、全員の名前を呼べるようにする。

2. 次回の活動の目標を実現するために、みんなからアイデアを集めましょう。

3. 集めたアイデアをくらべたり、つなげたりして、次回の活動の目標を実現するための方法を決めましょう。

日時	月	日	時	分から	時	分まで
内容						
役割						

図4 「あいであつめまシート」の例

でも記述できるようにしている。ここで示した「あいであつめまシート」は一例であり、指導者は学年や各活動の特性に応じて、「あいであつめまシート」の内容を変更しながら活用する。

このように、「あいであつめまシート」を活用することで、「活動の目標」の設定を行う機会をつくり、「活動の目標」を意識してアイデアを集めたり、仲間と話し合ったりすることができるようにする。

(3) 互いのよさや頑張りを認め合い、自己有用感を高める「ありがとうカード」

それぞれの係や班でイベントを実施した際、児童が互いのよさや頑張りを認め合い、自己有用感を高められるように「ありがとうカード」を開発した(図5)。

「ありがとうカード」には三つの項目があり、いずれも「活動の目標」の実現に関わる内容とした。一つ目の項目では、百分率で表された「ありがとうメーター」を用いて、「活動の目標」が実現できたかどうかを、他の児童の視点から把握できるようにする。「ありがとうメーター」は、イベントを主催する児童の自己有用感や次の活動に対する意欲の向上を図ることを目標としており、視覚的に理解できるようにしている。二つ目の項目では、「活動の目標」を実現できたと考える理由を把握できるようにする。理由を把握することで、自らのよさや頑張りを認識したり、次の活動においても継続すべき取組を検証したりできるようにする。三つ目の項目では、「ありがとうメーター」の割合が100%に達しなかった児童の理由を把握できるようにする。理由を把握することで、「活動の目標」を実現するための課題を見いだすことができるようにする。三つ目の項目に関しては、改善の視点としてではなく、単なる不満であると捉える児童がいることが予見される。そのため、三つ目の項目を改善の視点として捉えている児童を紹介したり、項目の内容を一部変更したりすることで、互いのよさや頑張りを認め合えるように支援する。

「ありがとうカード」の使い方は、まず、イベントを主催する児童が、「活動の目標」をあらかじめ「ありがとうカード」に記入しておき、指導者がそれを印刷して児童に配付する。活動終了後、イベントに参加した児童は、「ありがとうカード」を記入して、イベントを主催していた係や班に渡す。「ありがとうカード」を記入する時間は、休み時間や帰りの会、宿題等、各学級や学校の実態に合わせて設定する。最後に、イベントの主催者は、イベントに参加した児童が記入した「ありがとうカード」を活用して、「活動の目標」が実現できたかという視点で振り返りを行う。

「ありがとうカード」の使い方は、まず、イベントを主催する児童が、「活動の目標」をあらかじめ「ありがとうカード」に記入しておき、指導者がそれを印刷して児童に配付する。活動終了後、イベントに参加した児童は、「ありがとうカード」を記入して、イベントを主催していた係や班に渡す。「ありがとうカード」を記入する時間は、休み時間や帰りの会、宿題等、各学級や学校の実態に合わせて設定する。最後に、イベントの主催者は、イベントに参加した児童が記入した「ありがとうカード」を活用して、「活動の目標」が実現できたかという視点で振り返りを行う。

このように、「ありがとうカード」を活用することで、互いに認め合って自己有用感を高めたり、「活動の目標」の実現に関する他者からの評価を得て、次の課題解決につなげたりできるようにする。

(4) 議論の活性化を図る「活動交流会」

児童が様々な児童と交流し、互いの考えを取り入れ合って高め合える機会をつくるために、「活動交流会」を行うことにする。その際、児童による一方的な発表に留まるのではなく、児童同士が互いに高め合えるように、全員で話し合ったり、グループごとに分かれて話し合ったりするなど、目的や内容に応じて話し合いの形式を工夫する。

例えば、係活動において、「活動の目標」は設定できたが、そのためのアイデアが思い付かない

という児童のつぶやきを指導者が聞き取ったとする。その場合、係活動の仲間以外の児童からアイ

図5 「ありがとうカード」の例

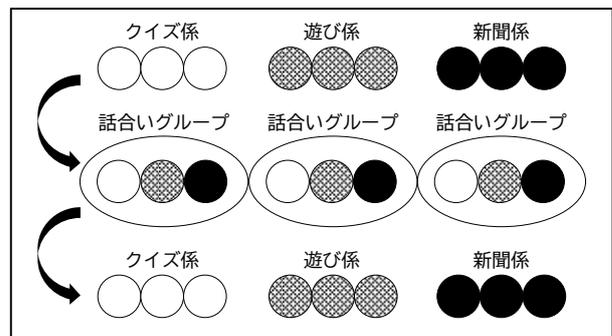


図6 「活動交流会」における話し合いの形式の例

デアを集められるように、別の係の児童同士で話し合いグループをつくる(p.5の図6)。それにより、児童は「活動の目標」を実現するためのアイデアを話し合いグループで集めることができるようになり、それぞれが集めてきたアイデアを基にして、係で合意形成を図れるようにする。

このように、「活動交流会」を実施することで、自分達では思い付かなかったアイデアを他者から集める機会となり、児童同士の議論の活性化につながる事ができる。

5 研究成果の検証方法について

研究の始期と終期に選択式の質問紙調査を行い、児童の「自ら問題を発見し、解決する態度」と「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」がどのように変容したのかを見取る。また、研究終期に記述式の質問紙調査を行い、特別活動の充実による授業および学級における児童の実感の変容を見取る。さらに、研究終期に指導者から見た児童の発言や行動の変容の聞き取り調査を行う。これらを総合的に分析することにより、児童が主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成が実現できたかどうかを検証する。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 本研究の目標を研究委員および実践校の管理職と共有する。
- (2) 実践校の全ての教員を対象として質問紙調査を行い、特別活動の取組状況について調査を行う。
- (3) 実践校の児童を対象とした質問紙調査を研究の始期と終期に行う。
- (4) 実践校の実態に照らし合わせ、「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成を実現するためにプロジェクト研究会を計画実施する。
- (5) 研究委員は、プロジェクト研究会での研修と実践校における実践の往還を進め、児童の言動を見取る。
- (6) 質問紙調査や児童の姿の変容を分析することで、特別活動と「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成とのつながりを分析し、研究の成果と課題を検証する。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究推進計画の立案	9月～10月	各実践校による実証授業
5月	指導者質問紙調査(実践校)	10月	第4回プロジェクト研究会(実践校による実証授業、研究協議)
6月	第1回プロジェクト研究会(研究の目標と方法の共有、講義、今後の計画等)	10月～11月	児童質問紙調査(第2回)
	児童および指導者質問紙調査(第1回)	11月	第5回プロジェクト研究会(研究の成果と課題の分析)
6月～7月	第2回プロジェクト研究会(活動交流会について実践交流、1学期の授業構想)	11月～12月	研究論文原稿執筆
8月	各実践校での指導者による授業実践	1月	研究発表準備
	第3回プロジェクト研究会(講義、1学期の実践交流、2学期の授業構想)	2月	研究発表大会
		3月	研究のまとめ

VI 研究の内容とその成果

1 研修と実践の往還

本研究は、研究委員が特別活動に関する研修と、実践校における特別活動の実践の往還を通して、児童が主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成ができるように、プロジェクト研究会を次のとおり計画・実施した(p.7の図7)。

	研修	実践
4月～7月	第1回研究会 (5月24日：総合教育センター) 本研究の概要説明を行い、研究の目標や方法について共通理解を図った。その後、「課題解決を重視した特別活動」についての講義を受けた。最後に、実践校における今後の方向性について協議を行った。	「あいであつめまシート」や「ありがとうカード」を活用した実践 活動内容に合わせて「あいであつめまシート」や「ありがとうカード」の内容を修正し、実践を行った。
	第2回研究会 (6月30日：総合教育センター) 授業実践動画を視聴し、児童が主体となる特別活動のあり方について協議を行った。その後、「児童の主体性を引き出す手立て」についての講義を受けた。	「活動交流会」の実践 児童が互いのよさを取り入れ、学級や学校の生活をよりよくするために話し合う実践を行い、次の「活動交流会」の実践のあり方を検討した。
夏季休業中	第3回研究会 (8月18日：総合教育センター) 1学期の授業実践動画を視聴し、1学期の実践を基に各研究委員が見出した課題について協議を行った。その後、「課題解決の過程の充実に向けた指導者の手立て」について講義を受けた。最後に、2学期の授業実践に向けた授業づくりを行い、「協働的に特別活動に取り組むための手立て」についての講義を受けた。	2学期の授業実践に向けた準備 研究委員が活動内容に合わせて「あいであつめまシート」や「ありがとうカード」の内容を修正した。
9月～11月	第4回研究会 (10月6日：実践校) 実践校の実証授業を参観し、課題解決の過程を重視した特別活動の協議を実施した。その後、「『学ぶ意欲を引き出す学習集団』の形成を目指す小学校の特別活動」についての講義を受け、児童が主体的に特別活動に取り組む手立てについての理解を深めた。	
	第5回研究会 (11月24日：総合教育センター) 課題解決の過程を充実させるための手立てについて協議を行った。その後、指導者から見た児童の変容について協議を行い、本研究における成果と課題を整理した。	実践の振り返り 1年間の実践を振り返り、「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成について成果と課題をまとめ、今後の実践につなげた。

図7 本研究における研修と実践の往還

2 課題解決の過程を重視した特別活動の実践

各研究委員は実践校において、次のとおり実践を行った(表)。実践を繰り返す中で、児童が「学級や学校の生活をよりよくする」という目的を意識して活動に取り組むことができた事例について以下に示す。

表 各実践校における特別活動の主な取組

指導者	実践校	対象学年	各活動	1学期の主な取組	2学期の主な取組
A	W校	第4学年	係活動	「友達いっばいのクラスにしよう」	「係活動で支え合えるクラスにしよう」
			集会活動	「山係友達集会をしよう」	「協力ハロウィーン集会をしよう」
B	X校	第5学年	集会活動	「〇〇ちゃん、ようこそその会を開こう」	「5-3祭りをしよう」
C	Y校	第3学年	係活動	「ナイス！サンキュー！がいっばいの学級にしよう」	「みんながスマイルの学級にしよう」
D	Z校	第6学年	児童会活動	「みんなが楽しめる学校にしよう」	「イワナ給食で仲良くなるよう」

(1) 児童が学級活動の目的を意識して課題解決を行えるようにした事例

ア 係活動の組織づくりにおいて、児童が主体的に活動に取り組むきっかけをつくった事例

W校の指導者Aの学級では、「児童がやりたいから」という理由を基にして係活動の組織づくりを行っていた。しかし、指導者Aは第3回研究会の講義を受けて、児童が主体的に特別活動に取り組むためには、係活動の組織づくりにおいても児童の目的意識が重要であることを学んだ。

そこで、2学期が始まるとすぐに、学級や学校の生活をよりよくするためにどのような姿を目指したいかを児童同士で話し合う時間を設け、児童は「互いが支え合う関係性を築く」という「中

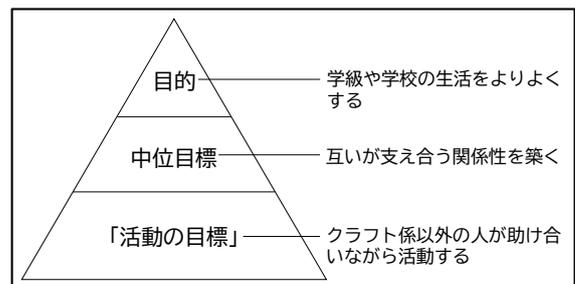


図8 係活動の組織づくりにおける目的と各目標との関係性

位目標」を設定した(p.7の図8)。その後「中位目標」を基にして、児童から係活動の組織づくりに関する議題の提案がされ、学級会の議題に決定した。学級会の事前準備として、指導者Aの助言のもと、児童は学級にあるとよいと思う係について、アンケート調査を行い、短冊にまとめることで、意見を比較する活動から始められるようにした。

これらの取組を踏まえて行われた学級会では、学級にあるとよいと思う係について、「中位目標」を意識して話し合う児童の姿が見られた(図9)。児童aは、クラフト係がよいと思う理由について、作り方が分からないときにクラフト係が手助けする経験を積み重ねることで、互いに支え合う関係性を築けると説明した。その意見を聞いた児童bは少し考えた後、クラフト係と関わる機会は増えるが、それでは学級全員が互いに支え合う関係性を築けないのではないかと発言した。二人のやりとりを聞いていた児童cは、互いの発言のよさを取り入れ、クラフト係以外の方が助け合いながら活動することで、学級全員が互いに支え合う関係性を築くことが可能ではないかという提案をした。



司会：議題は「2学期の係活動を決めよう」です。提案理由は、2学期はたくさん行事があって、今より支え合う仲間を増やしたいので、係活動をして支え合う学級にしたいからです。今回のめあては、「支え合う」を意識して意見を出し合うことです。それでは、学級にあるとよいと思う係について、意見がある人はいますか？

【中略】

児童a：クラフト係をつくとよいと思います。理由は、作り方が分からないとき、係の人が「こうやったらいいよ」と声をかけることで、お互いに「支え合う」ことができるからです。

児童b：それは、係の人と「支え合う」ことができるだけで、学級として「支え合う」ことにつながらないのではないですか？

児童c：係以外の方が教え合うようにすれば、学級として「支え合う」ことができるようになると思うのですが、どうですか？

図9 学級会で係活動の組織づくりを行っている場面

このように、「児童がやってみたいから」という理由だけでなく、「何のために係活動をするのか」を意識しながら係をつくることで、児童は係活動に取り組むよさに気づき、主体的に活動に取り組むきっかけをつくることのできた。

イ 「活動の目標」を学級で設定したことで、児童が目的意識をもって活動した事例

X校の指導者Bの学級では、学級や学校の生活をよりよくするために、男子と女子が分かれて遊んでいる状況はよくないと考えた児童が、「今よりも男女が仲良くなりたい」という学級会の議題を提案した。学級会では、児童が「今よりも男女が仲良くなる」という「中位目標」を基にして、「5-3祭り」という名で集会活動を実施することにした(図10)。また、5-3祭りでは、児童がそれぞれ屋台を設置し、屋台ごとに別々の遊びを行うことで男女の交友を深めることにした。

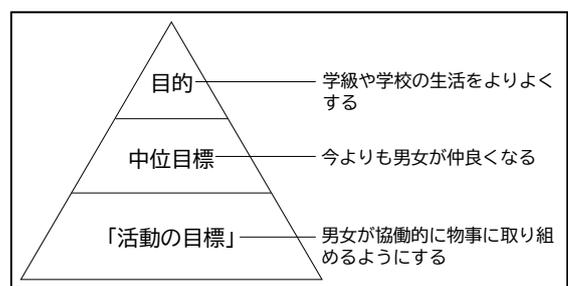


図10 5-3祭りにおける目的と各目標との関係性

指導者Bは第4回研究会における研究協議を受けて、集会活動に取り組むにあたって、「仲良くなろう」や「協力しよう」といった抽象的な目標ではなく、具体的な児童の姿や行動を目標とした活動にすることが重要であると学んだ。そこで、指導者Bは、5-3祭りの屋台で行う遊びについて話し合う前に、どのような工夫を取り入れると男女がより仲良くなるのかについて、児童が話し合える場を設定した。

男女がより仲良くなるための工夫の話合いを始めるにあたって、指導者Bは男女の仲がよい状態とは、どのような姿を想像しているかを児童に問いかけた。指導者Bは、児童が発言した内容

を「男女の仲がよい状態とは、男女問わず遊びに誘える状態ということではないですか。ゴールは見えましたか。」と総括し、児童が「中位目標」を意識できるようにした。

男女がより仲良くなるための工夫の話合いでは、児童から「趣味や好きなものを聞く」「男女でチームを組む」等の意見が出た。児童はそれぞれの意見に込められた思いを全体で確認した後、学級全体で意見の共通点や相違点を見つけ、共通点を基にしてグルーピングを行った(図11)。グルーピングにより、「互いに知

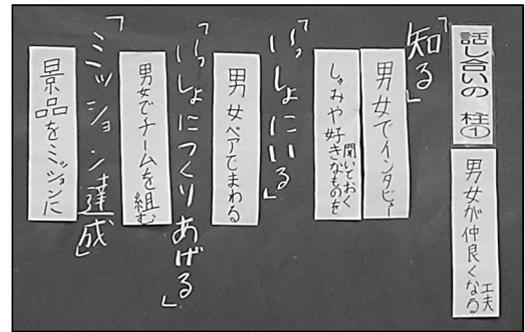


図11 男女がより仲良くなるための工夫をグルーピングした際の板書の様子

互いに知ること仲良くなる」「物理的な距離を縮めることで仲良くなる」「協働作業をすることで仲良くなる」といった視点で意見を整理することができ、児童がそれぞれの工夫を比較しながら交流することができた。その結果、「協働作業をすることで仲良くなる」という考えに多くの児童が賛同し、男女が協力して取り組める内容を盛り込むことに決まった。これにより、屋台で行う遊びの「活動の目標」が「男女が協働的に物事に取り組めるようにする」と決まり、「活動の目標」を実現するための遊びについての話し合いが行われた。また、他の工夫に賛同する意見もあったため、屋台の遊びの一部に他の工夫も取り入れるという形で全員の合意形成を図った。

このように、5-3祭りの「活動の目標」を学級で設定したことにより、「活動の目標」を設定する話し合い以降においても、児童は「中位目標」や「活動の目標」を意識しながら計画や活動を行うことができた。

(2) 児童が「あいであつめまシート」をより効果的に活用できるようにした事例

Y校の指導者Cは、第3回研究会の講義や第4回研究会の実証授業を受けて、児童が目的意識をもって活動に取り組めるように「あいであつめまシート」を活用して実践に取り組んできた。しかし、学級や学校の生活をよりよくするためではなく、イベントをよりよくするための話し合いになってしまっている児童の姿が見られた。そこで、児童が「あいであつめまシート」を有効に活用できるように、指導者Cは二つの手立てを講じることにした。



図12 「活動の目標」を掲示した話し合いの様子

一つ目の手立ては、活動内容に関するアイデアを出し合う際に、「あいであつめまシート」に書いた「活動の目標」と、係で話し合いたい内容を机上に掲示できるようにしたことである(図12)。机上の「あいであつめまシート」と掲示物により、「活動の目標」が常に児童の視界に入るようになった。話し合いの場面では、掲示物に示された「活動の目標」を確認したり指を差したりする児童の姿が見られ、「活動の目標」を意識してアイデアを出し合うことができるようになった。

二つ目の手立ては、活動内容のアイデアを出し合った後、係で合意形成を図る際に活用する協議用シートを作成したことである(p.10の図13)。これまでの実践では、学級や学校の生活をよりよくするという視点ではなく、自分達が楽しめるかどうかという視点でイベントの内容を決定している様子がうかがえた。そこで、出し合ったアイデアが「活動の目標」にどれだけ近づけるかという視点で協議できるように、協議用シートに縦軸を作成し、「活動の目標」に近づくようなアイデアだ

と考えた場合はシート上部に書き、「活動の目標」に少しだけ近づけるようなアイデアだ
と考えた場合はシート下部に書くようにした。このとき、指導者Cは児童が出したアイデアを付箋に書けるようにすることで、他の意見との兼ね合いで考えが変わった場合でも、付箋を上下に動かせるようにしていた。

このように、児童の発達段階に合わせて、「あいであつめまシート」を補完する手立てを講じることで、児童が目的意識をもって活動に取り組めるようになった。

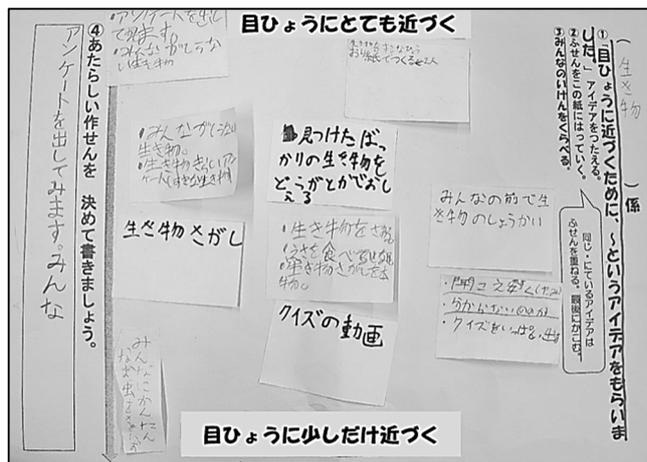


図13 生き物係が作成した協議用シート

(3) 児童が「ありがとうカード」を活用することで、活動の成果や課題を見いだした事例

指導者Dが所属するZ校は小規模校であり、第6学年の在籍児童数は4人である。そのためZ校では、児童が多様な意見に触れ合う機会を多く確保するため、第5学年と第6学年をリーダーとした班を中心に児童会活動が行われている。

指導者Dは第1回研究会を受けて、少人数の学級でも有効に使える「ありがとうカード」の活用方法を検討した。そこで、児童会活動は全校児童が参加するという利点を生かし、第1学年から第4学年までの児童が、第5学年と第6学年の児童に対して「ありがとうカード」を送ることにした。その際、第1学年と第2学年に関しては、学級担任が聞き取りを行い、代筆する方法を進めることにした。

活動終了後、指導者Dは「ありがとうカード」を用いて、同じ班のリーダー同士で「振り返り」を行う時間を設けた(図14)。ある班の児童は、自分達の活動の成果を明らかにするために、「ありがとうメーター」を確認するところから始めた。下級生が記述した「ありがとうメーター」の値が100%であることを確認すると、感嘆の声をあげる児童の姿が見られた。また、満足した理由の記述についても確認していた。さらに、児童は活動の課題を明らかにするために、「ありがとうメーター」の値が100%ではない児童の記述に着目した。児童dは「説明のとき、途中で声が入ってきてわかりにくかったから」という記述を読んだ際、「他の人が盛り上がっていただけじゃない」と発言した。この発言からは、活動当日の説明時に、下級生が騒いでいることは把握していたが、それは自分達が解決することではないと判断したことがうかがえる。しかし、「ありがとうカード」の記述を基にして、改めて班で活動を振り返ることにより、児童eの「静かにするように呼びかける必要があるかも」と



児童d：（「ありがとうメーター」が）100%だ。
 児童e：（下級生の）□□ちゃんは100%。
 児童f：よかった！
 児童e：（理由は）ルール説明がわかりやすかった。よくなかった部分は何も書いていない。□□ちゃんはよかったということだね。
 【別の児童の「ありがとうカード」を見る】
 児童f：おお、100%。
 児童d：おお、いいじゃない。
 児童e：（理由は）活動の雰囲気を楽しませてくれたから。
 【中略】
 児童e：課題の部分を見ていこう。
 児童e：（100%でない理由は）説明のとき、途中で声が入ってきてわかりにくかったから。
 児童d：他の人が盛り上がっていただけじゃない？
 児童e：静かにするように呼びかける必要があるかも。
 児童d：（頷きながら）そうだね。

図14 「ありがとうカード」を用いて、同じ班のリーダー同士で「振り返り」を行っている場面

いう発言につながり、みんながより楽しめるようにするためには、遊びの説明をする際に、静かな環境を整えることが必要であるという発想をすることができた。

このように、「ありがとうカード」を「振り返り」の場面で活用することで、活動の成果や課題を明らかにしたり、活動を実施した児童の自己有用感や次の活動に対する意欲の向上を図ったりすることができた。

(4) 児童が「活動交流会」において、互いの考えを取り入れることができた事例

係活動は同一グループでの活動を主としているため、次の活動に向けた話合いが低調であることを気にしている児童がいることをW校の指導者Aは把握した。そこで、指導者Aは第2回研究会を受けて、児童が様々な児童と交流し、互いの考えを取り入れて高め合える機会をつくるために「活動交流会」を実施した。

指導者Aは、導入で本時のめあてを確認した後、別の係の児童同士で話合いグループをつくった。このようなグループを作成した意図は、係のメンバー以外の児童と交流して、より多くのアイデアを集めることで、係活動を通して「互いが支え合う関係性を築く」という「中位目標」(p.7の図8)を実現できるようにするためである。別の係の児童同士で話し合った後は、同じ係の児童が集まり、得られたアイデアを共有した後、「中位目標」を実現するための方法を話し合えるようにした。

学級通信係の児童gは、学級通信の内容について係で話し合ってもアイデアが出てこなかったため、別の係の児童同士の話合いで他の児童に相談した(図15)。これまで発行された学級通信は、学校行事等の出来事を題材としていたことで、内容に偏りがみられることをテレビ局係の児童hが指摘した。その後、まんが係の児童iは日常生活を題材にできることを提案した。それを受けて児童hは、「中位目標」を意識して計画された係活動での出来事も、学級通信の記事にできることを提案した。児童gは、提案されたアイデアを「あいであつめシート」に書き加えながら、児童g自身も広告を入れるという新たなアイデアを出し、相談を受ける側の児童hが、自分の係でも動画に広告をつけるかどうか検討する姿が見られた。その後の学級通信係の児童同士で集まった話合いでは、児童gは「僕いっぱい聞けたよ。学級通信に身近なことを載せる、クイズを載せる、広告を入れる、大きい紙に印刷する」と話していた。また、授業の振り返りでは、「みんなにアイデアを出してもらえてやりやすくなった」と笑顔で話していた。



児童g：アイデアが無いけど、学級通信の中身をどうすればいいと思う？
 児童h：「支え合う」をテーマにした(これまでの)学級通信の内容が固まっちゃっているからね。
 児童i：確かに。
 児童h：特別なイベントの記事ばかりになっているから、えーと。
 児童i：日常であったこととか。
 児童h：うん。係のイベントで自分が体験した(支え合いの)こととか。
 児童g：(「支え合う」ことを広める)広告とかも入れた方がいいかな？
 児童h：テレビ局係も(広告を)入れようかな。
 【自分の係に戻って、情報の共有】
 児童g：僕いっぱい聞けたよ！学級通信に身近なことを載せる、クイズを載せる、広告を入れる、大きい紙に印刷する。

図15 別の係の児童同士が話し合っている場面

このように、所属する係以外の児童と交流し、互いの考えを取り入れ合って高め合える機会をつくる「活動交流会」を行ったことで、「活動の目標」を実現するための新たな考えが生まれ、議論の活性化が図られたことにより、課題を解決する糸口を見つけることができた。

3 児童の変容

(1) 児童の意識の変容

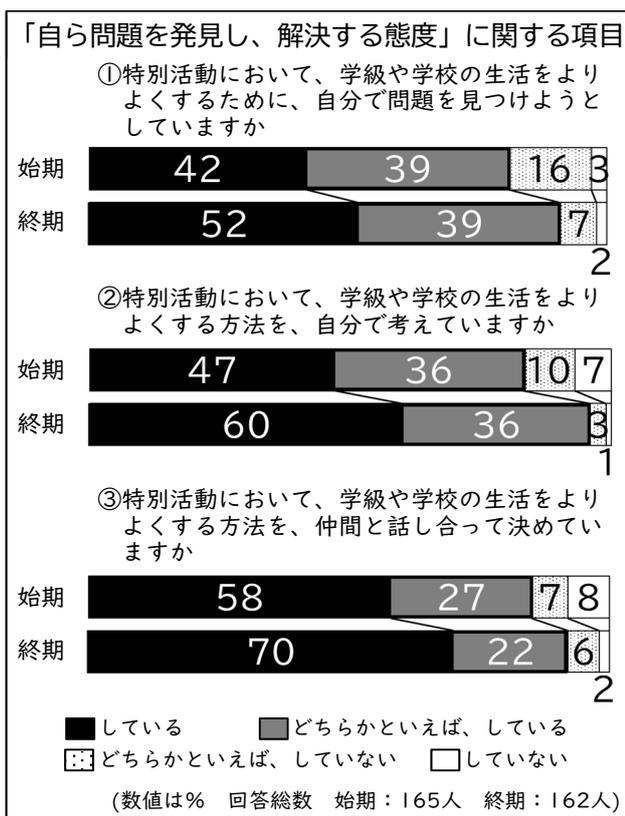


図16 「自ら問題を発見し、解決する態度」に関する項目の結果

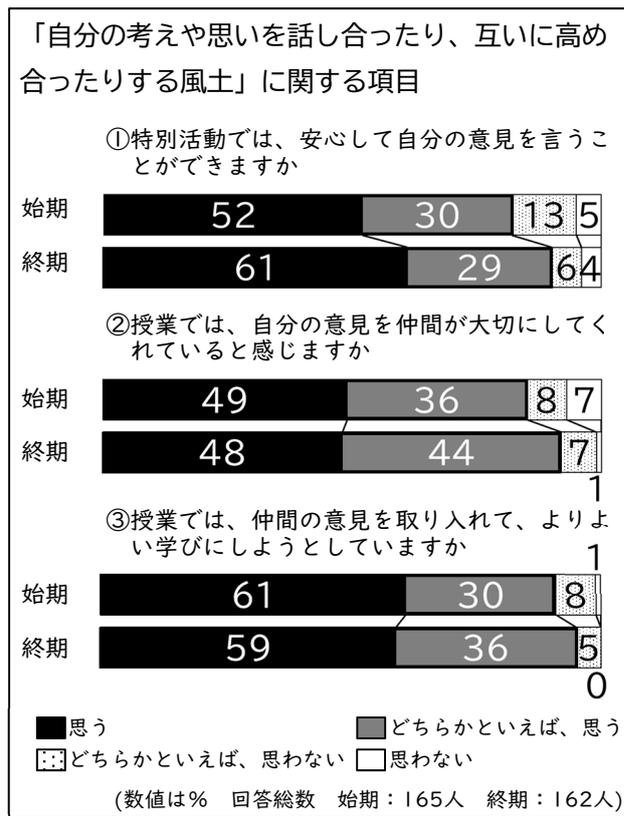


図17 「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」に関する項目の結果

実践校の児童を対象に実施した選択式の質問紙調査の結果を、研究始期と終期で比較した。「自ら問題を発見し、解決する態度」に関する項目の結果では、各項目で「している」「どちらかといえば、している」と肯定的に回答した児童の割合が増加した(図16)。「問題の発見・確認」に関わる「①特別活動において、学級や学校の生活をよりよくするために、自分で問題を見つけようとしていますか」という設問に対して、肯定的な回答をした児童の割合が81%から91%に増加した。「解決方法等の話し合い」や「解決方法の決定」に関わる「②特別活動において、学級や学校の生活をよりよくする方法を、自分で考えていますか」という設問に対して、肯定的な回答をした児童の割合が83%から96%に増加しており、「③特別活動において、学級や学校の生活をよりよくする方法を、仲間と話し合っていて決めていますか」という設問に対して、肯定的な回答をした児童の割合が85%から92%に増加した。

「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」に関する項目の結果においても、「思う」「どちらかといえば、思う」と肯定的に回答した児童の割合が増加した(図17)。「①特別活動では、安心して自分の意見を言うことができますか」という設問に対して、肯定的な回答をした児童の割合が82%から90%に増加した。また、「②授業では、自分の意見を仲間が大切にしてくれていると感じますか」という設問に対して、「思う」と回答した児童の割合は僅かに減少しているが、肯定的な回答をした児童の割合が85%から92%に増加した。さらに、「③授業では、仲間の意見を取り入れて、よりよい学びにしようとしていますか」という設問に対しても、「思う」と回答した児童の割合は僅かに減少しているが、肯定的な回答をした児童の割合が91%から95%に増加した。

さらに、研究終期に児童に実施した記述式の質問紙調査からは、選択式の質問紙調査の結果と同

様に、「自ら問題を発見し、解決する態度」や「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」についての記述が見られた(図18)。

- 「自ら問題を発見し、解決する態度」に関する記述
- ・係活動以外でも、仲間と協力したら、もっとクラスをよりよくできると思った。
 - ・係活動でたくさん協力できたから、次はみんなと協力してよりよいクラスにしようと思った。
 - ・集会活動をしたことで、話し合いをして、もっともっと学校にいるみんなとよりよい学校にしたいと思えるようになった。
 - ・集会活動以外でも協力していくと、自分達で学級をつくりあげられると思った。
 - ・児童会活動に取り組んだことで、仲間と協力したらできないこともできると思えるようになった。
- 「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」に関する記述
- ・係活動は人との交流があるので、授業でも発表しやすくなった。
 - ・係活動に取り組んだことで、みんなの意見を聞くことで自分の考えが変わると思えるようになった。
 - ・集会活動をしたことで、仲のいい人が増え、間違ったことを言っても責められないから、授業で安心して発表することができるようになった。
 - ・集会活動を通してみんなと仲良くなって、安心できるクラスになった。
 - ・集会活動をしたことで、体育などでアドバイスをもらえるようになった。
 - ・児童会活動に取り組んだことで、自分の思っていることが同じでなくても、相手の意見の方がいいと思えるようになった。
 - ・児童会活動で信頼関係が深まり、色々なことを仲間と話し合えるようになった。

図18 研究終期に実施した記述式の質問紙調査の結果の一部

これらのことから、児童が「自ら問題を発見し、解決する態度」を身に付け、「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」の醸成につながったことがうかがえる。つまり、特別活動において、児童が学級や学校の生活をよりよくする課題解決の過程の充実を図ることで、児童が主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成につながったと考える。

(2) 指導者から見た児童の変容

本研究での取組について、研究終期に研究委員から聞き取り調査を実施した。指導者は、特別活動において、児童が学級や学校の生活をよりよくする課題解決の過程の充実を図ることにより、「自ら問題を発見し、解決する態度」や学級の風土が変容したと感じていた(図19)。

- 「自ら問題を発見し、解決する態度」に関する所感
- ・研究始期では、イベントを実施しても、次の課題解決につなげようとする姿が見られなかった。しかし、実践を積み重ねることで、学級や学校の生活をよりよくするために、他の児童からの意見を基にして、自分達の活動の改善をしようとする児童が多くなった。それに伴って、各教科等における児童の姿も変容した。例えば、体育科では、「バトンパスをうまくできれば、もっとよいタイムが出せると思うから、リレーのバトンパスの練習をしたい」や「表現運動において、太鼓を叩くタイミングを合わせられるようにみんなで練習したい」など、自ら課題を見だし、解決しようとする姿が見られるようになった。
 - ・研究始期では、児童が活動を振り返る場面に苦勞したが、「ありがとうカード」等を活用して実践を繰り返してきたことにより、特別活動以外の場面でも、児童が学習の目的を意識して、自分達の活動を振り返るようになった。例えば、「グループで協力して行動する」という目標を立てた校外学習では、多くの児童が「グループの協力の姿勢」の観点で振り返りを行うことができた。
- 「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」に関する所感
- ・研究始期では、休み時間に児童同士の揉め事があった際、指導者が介入しなければ、児童同士では解決することができなかった。係活動においても、活動に対する不満ばかりを述べたり、他の児童からの意見を認めることができなかったりする姿が多く見られた。しかし、研究が進むにつれて、児童から「係活動はみんなが楽しめるものだ」という発言が出てくるようになり、少しずつ他の児童からの意見を取り入れられるようになってきた。それに伴って、学級生活における児童の姿にも変化が現れた。休み時間に揉め事があった際、周りにいる児童が仲介に入り、互いの言い分を話せる状況をつくるようになった。そして、問題が起きた原因を明確にして、解決策をみんなで話し合うなど、自分の考えや思いを話し合える雰囲気が変わってきた。
 - ・少人数の学校なので、クラス替えはなく、研究始期から仲間同士のつながりはあった。しかし、特別活動の実践を繰り返すことにより、気軽に話し合ったり、相談したりする姿が多く見られるようになった。さらに、スピーチ等でも、自分の考えを詳しく伝えようとする姿が多く見られるようになった。

図19 授業や学級生活における児童の変容に関する指導者の所感の一部(下線は筆者)

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 学級活動や児童会活動を行う際、児童が目的を実現するための具体的な姿や行動を「活動の目標」として設定することで、児童が目的意識をもって活動に取り組むことができた。
- (2) 「あいであつめまシート」「ありがとうカード」「活動交流会」の手立てを講じることで、児童が「活動の目標」をより意識できるようになり、特別活動における課題解決の過程が充実した。
- (3) 特別活動において、児童が学級や学校の生活をよりよくする課題解決の過程の充実を図ることにより、児童の「自ら問題を発見し、解決する態度」が身に付いた。さらに、「自分の考えや思いを話し合ったり、互いに高め合ったりする風土」が醸成され、児童が主体的に学びに向かう基盤となる「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成につながった。

2 今後の課題

- (1) 本研究では、課題解決の過程において、児童が集団での合意形成を図る機会を設定したが、さらによりよい集団づくりを行うためには、個人が自己決定をする機会の充実を図ることが必要である。
- (2) 特別活動における経験を学校生活で生かせるように、各学年で身に付けたい資質・能力の系統性を意識したうえで、学校全体で課題解決の過程の充実を図る必要がある。

文 献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編」、平成30年(2018年)
 - 2) 滋賀県教育委員会「第Ⅱ期 学ぶ力向上滋賀プラン～『読み解く力』の育成を通して～」、平成31年(2019年)
- 滋賀県教育委員会「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査等の結果の概要について(県内公立学校)」、令和4年(2022年)

トータルアドバイザー

文部科学省初等中等教育局視学官 安部 恭子

専門委員

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課主査 川端 清司

研究委員

多賀町立大滝小学校教諭 大野美菜子

甲賀市立希望ヶ丘小学校教諭 渡邊 早織

栗東市立大宝小学校教諭 人見 優衣

野洲市立野洲小学校教諭 松本 祐亮